No.41

# Newsletter

国際音楽資料情報協会日本支部

April, 20, 2011

ISSN 1347-7277

# 第 49 回 IAML 支部例会報告 関根敏子

山田晴通氏「日本におけるポピュラー音楽: 歴史的概説の試み」と図書館見学

日時: 2010年12月5日(日)13:30~16:50

(図書館見学 16:10 ~ 16:50)

場所:東京音楽大学附属図書館 5F 教室

今回の例会では、会員の山田晴通氏が、2010 年 IAML モスクワ国際会議での発表をもとに、日本のポピュラー音楽の歴史を発表した後、会場を提供してくださった東京音楽大学図書館の御好意により、阿部真知子氏の御案内で内部を見学させていただいた。出席者は発表者も含めた会員10名、非会員4名の合計14名、司会は関根敏子であった。非会員の中には、国立国会図書館、NHKビジネスクリエイト、東京音楽大学大学院学生などがいて、内容への高い関心を思わせた。

発表者の山田晴通氏は、現在東京経済大学の教授で、日本ポピュラー音楽学会の元会長、IAML 日本支部会員、また音楽文献目録委員会(RILM 日本支部)の委員(2004年度以後)、専門は地理学とメディア研究、ポピュラー音楽など、多岐にわたる。(山田氏の活動や論文についての詳細は以下のサイト参照:http://camp.ff.tku.ac.jp/YAMADA-KEN/official.html)

山田氏の今回の講演は、2010年6月29日におこなわれた モスクワ国際会議での発表に基づいている。発表タイトルは「Popular music in Japan: So different, not so different」(英文要旨は http://camp.ff.tku.ac.jp/YAMADA-KEN/Y-KEN/fulltext/10IAML-MoscowR.pdf 参照)。全体としては明治以後の洋楽導入史と音楽文化の変遷を中心とした興味深い内容であったが、モスクワでの発表が30分であったのに対してIAML 例会は約90分ということで、さらに詳細が敷衍されていた。以下は、その概要である(♪は録音使用曲、見出は報告者による付加)。

#### \*\*\*\*

レコードの国際市場において日本は、アメリカ合衆国に次ぐ2番目に大きな市場である。しかし日本の市場は、独自の様相をもつ。それは国内に重点が置かれていることである。たとえば2006年にプリンスのアルバム「3121」が国際的に同時発売され、各国のチャートで1位であったとき、日本ではKat-tunのベスト盤が1位であったが、前者の世界総売上

枚数よりも、外国では発売されていない後者の日本国内での 売上の方が優るという事態が起きた。問題は言葉の壁である。 それは、すでに江戸末期から明治時代の洋楽導入にも見出さ れる。

#### 1. 洋楽導入期

19世紀末、とくに 1867 年の明治維新から西洋音楽が積極的に導入された。なかでも日本人一般に大きな影響を与えたのが、学校教育である。伊沢修二 (1851-1917) は、アメリカの教育体制について調査するため渡米し、帰国後に音楽取調掛 (後に東京音楽学校、現東京藝術大学)を設立、恩師L. W. メーソン (1828-96) を音楽教師として招いた。

1880 年代には、伊澤やメーソン他によって編纂された唱歌集が出版される。それらの旋律は西洋の民謡だったが、歌詞は日本語訳かまったく新しい言葉がつけられていた。たとえば「蛍の光」(1882 年刊行)の旋律はスコットランド民謡「Auld Lan Syne」だが、歌詞(とくに最後の方)は何度も書き換えられた(♪1909 年の録音、2声とピアノ伴奏)。なお、1910年には、日本人作曲家による「尋常小学読本唱歌」が出版されている。このように西洋音楽との接触で生まれた音楽は、当時の日本人にとって受け取りやすい部分だけが肥大していく(たとえば日本の都節や民謡などの要素を取り込んだヨナ抜き音階は西洋の民謡と共通点が多い)。

#### 2. 初期の録音

現存する日本人演奏家の録音 (川上音二郎一座) は、1900年にフランスのパリでおこなわれているが、商品化された事実は確認されていない。その3年後 (1903) には F. W. ガイスバーグ Gaisberg (1873-1951、録音技師・プロデューサー)が東京に出張録音し、その一部はヨーロッパでレコード化され日本に輸入された。いずれも内容は、寄席での芸能(浄瑠璃、義太夫、雅楽、話芸など)である。その他、初代快楽亭ブラック (本名 Henry James Black、英領オーストリア生まれ)の録音、アメリカからの出張録音 (軍艦マーチなど)も残されている。

アメリカのジャズは1900年頃にはニューオリンズに存在しており、1917年には録音されており、ブルースも1923年にもっとも古い録音が存在する。しかし日本では、こうした音楽が最初は輸入品であり、安価になるまで普及しなかった。最初に流行した歌については2説ある。ひとつは、大正時代に神長瞭月(1888-1976)がヴァイオリンを弾きながら歌っ

た「松の声」(1908)、もうひとつは、女優の松井須磨子(1886-1916)が劇「復活」(トルストイ原作、島村抱月訳)の中で歌った「カチューシャの唄」である。この歌はSP盤として発売され(表に歌、裏には台詞)、数千枚も売れたという。

ポピュラー音楽の分野では、商品として成功するかどうか、つまり市場性が重要であり、発売枚数や売上げによって評価される。ここが、CDの売り上げ枚数が評価とは無関係のクラシック音楽と大きく違うところである。

#### 3. 新民謡

民謡という言葉は、近代の日本で「Volkslied」(独)や「folk song」(英)の訳語として登場した。その後、中山晋平(作曲家)と野口雨情(作詞家)などが一緒に作った「新民謡」が登場する。当時の民謡を収集すると、西洋音楽とあわないもの、卑猥な内容のものも多い。そこで、国家として西洋に対して恥ずかしいものを削除し、西洋音楽の教育を受けた作曲家が五線譜に整えていく。望ましい方向へ純化された新しい民衆の歌が求められ、やがてそれに応える新作が作曲されるようになった時期、それはまた、日本のレコード業界の再編成の時でもあった。

多くの新民謡は、藤原義江 (1898-1976) や佐藤千夜子 (1897-1968) など、西洋クラシック音楽の発声訓練を受けた声楽家によって歌われ流行した (♪「鉾をおさめて」、「東京行進曲」、「波浮の港」)。一方、「ちゃっきり節」 (北原白秋作詞、町田嘉章作曲) は、1937年に芸者歌手の市丸 (1906-97) のレコードが発売されてから大ヒットした。これも新民謡で、静岡の私鉄のテーマパークの宣伝用のために作られた。作曲の町田嘉章は、邦楽の近代化に尽力した人物である。このように、新民謡と初期の流行歌には、共通の詩人や作曲家が見出される。西条八十も、流行歌から軍歌まで幅広いジャンルの歌詞を手掛けた。

#### 4. 浅草オペラ

日本で最初の商業オペラ劇場は帝国劇場 (1911) だったが、 興業の失敗で 1916 年に閉鎖された。その後、浅草の見世物 小屋で、有名なオペラの断片が上演されるようになる。なぜ なら当時、全曲を通せるのは、許可を得た劇場だけだったか らである。もっとも人気があったのは、既存の曲をつなぎあ わせて、日本語(訳など)歌詞をつけたコミカルな作品であっ た。この西洋音楽の選択的摂取は、大成功であった(♪「女 軍出征」、1917、「It's a Long Way to Tipperary」、田谷力三)。

しかし浅草の繁栄は、1923年の関東大地震により下火となる。その要因のひとつは、税金政策が変更され、贅沢品に10割関税がかけられたからである。そのため、大幅に西洋諸国(とくにアメリカ、イギリス、ドイツ)から輸入されていた蓄音器や録音盤(レコード)は贅沢品とされ、関係業者は国産化に取り組むようになった。それまでの日本製は音質や品質も悪かったので、外国の技術を導入しての生産が開始された。

#### 5. レコード会社と企画流行歌

その結果、1930年前後からは5社による寡占体制となる。 コロンビアとビクターは、アメリカ人を社長とする合弁会社 であり、ポリドールは、日本の独自資本だがドイツから技術 の提供を得ていた。ここに、キングレコード(講談社はキン グという総合雑誌を出版していた)とテイチク(関西)が加 わる。この5社体制は、1970年代にCBS ソニーなどが登場す るまで続いた。

このような状況は、日本ポピュラー音楽の発売法に大きく 影響する。すなわち、すでに流行している歌 (流行歌)を録 音するよりも、未紹介の外国音楽や新しく作られた曲を録音 して売り出す「企画流行歌」(三井徹の著作参照)が次々と 生まれた。

その例として、二村定一(1900-48)が歌った2曲がある。「私の青空」は当時世界的に大ヒットした歌で、1928年にコロンビアとビクターから同時発売された。一方、同じ年に発売された「アラビアの唄」(堀内敬三作詞)も大ヒットしたが、この曲は事情が異なる。なぜならアメリカではヒットしておらず、レコードも日本に入っていないからである。しかしオーストラリアだけにある楽譜の編曲と一致する。

同様の構図はその後も永く残り、例えば 1962 年に日本で大ヒットした「ルイジアナ・ママ」もアメリカでは知られていなかった。これは、草野昌一(現シンコ―ミュージック・エンターテインメントの創設者)が漣健児というペンネームで歌詞を訳して大ヒットさせた曲である。草野はその後もヒット曲を次々と世に出すが、当時の流行曲は、このように日本市場への紹介者を必要としていた。

その他、1920年代に来日したアメリカ人雑誌記者バートン・クレイン (1901-63) が 1930年代に軽妙な日本語歌詞で録音したヒット曲もある (詳細は山田氏の論文参照)。1930年代には、日本移民の2世を通じてハワイアン音楽も入ってきた。川畑文子 (1916-2007) はダンサー (タップダンス) が本業であったが、19歳で録音した「あなたとならば」(♪) がヒット、伴奏楽器にはスチールギターが使用されていた。同じ頃には洋行船のバンドで演奏して修行した者も多い。ディック・ミネ (1908-91) はまったくの日本人だが、自分で歌詞を訳し、アメリカ風の発音で歌い、人気を得た (♪「ダイナ」)。

西洋音楽の紹介者とされる淡谷のり子と灰田勝彦は、対照的な軌跡を描く。東洋音楽学校出身の淡谷のり子(1907-99)は、シャンソンやジャズを歌い、ブルースの女王とも呼ばれ、驚異的な数のレコードを残したが、1939年に戦争が始まると録音させてもらえなかった。一方、灰田勝彦(1911-82)は、ハワイ生まれだが、父が亡くなったので10代から日本で育った。折からのハワイアン・ブームにのり、ビクターからデビュー。同時にジャズ、シリアスな曲からコミカルな曲まで歌い、かなり早くから軍歌(軍事歌謡)を取り上げていた。灰田のヒット曲には「こりゃさの音頭」(日米開戦前とはい

え戦時下に英語で歌われた)、「バタビヤの夜は更けて」(1942、南方歌謡)、「遙かなるサンタルチア」(本来はB面の曲)、「加藤部隊歌」などがある。

#### 6. ロカビリー

第二次世界大戦後、フランク永井、ペギー葉山、マヒナスターズなど占領時の米軍キャンプなどで鍛えられた歌手やグループが次々と登場する。歌っているのはアメリカ系の音楽で、ジャズ (スイング、ビパップ、モダン)、ハワイアン、カントリー、ラテンなどさまざまであった。

そして 1950 年代になると、ロカビリーと呼ばれる新しいジャンルが人気を博した。当時のアメリカでは、ブルースから生まれたロックンロールと、ヒルビリー・ミュージック(ヒルビリーとは田舎者の意)の中でもカントリー・ミュージックの要素が強いものが結びついてロカビリーと呼ばれていた(カントリー・ミュージックは 1920 年頃にテネシー州で成立)。

ところが、日本のロカビリーはアメリカと少し違う。アメリカでは、プレスリーはロックンローラー、ポール・アンカは甘いラブ・ソングを歌うアイドルというようにまったく別に考えられていたが、日本ではそのような区別は理解されず、ロックンロールやカントリー&ウェスタンなどもまとめて、日本の文脈におけるロカビリーという独自のジャンルが形成されていくのである。このように、外国から入ってきたものを独自に変形すること、受け入れたものを変質させていくことが、日本の特徴と言えよう。

#### 7. グループサウンズとフォーク

1960 年代になると、日本ではテレビが普及する。この頃に ビートルズが来日しているが、「A Hard days night」の邦 題は「ビートルズがやってきたヤア!ヤア!ヤア!」に、 「Help!」が「Help! 4人はアイドル」となっている。当時、ビートルズのコピーバンド、「東京ビートルズ」(日本人4人組) が「抱きしめたい」という曲でデビュー、ナイトクラブでは 英語、レコードでは日本語で歌っている。

日本では、「ザ・ヴェンチャーズ」というグループが、ビートルズと人気を2分していた。ところが、世界的にみると、事情は違う。アメリカでは一発屋に近く、すぐに人気は衰えたが、日本だけは今でも来日するほど有名であった。その後、日本ではグループサウンズやフォークなどが流行する。

一方、演歌は 1960 年代末から再編成が進んだ (輪島 裕介著『創られた『日本の心』神話 『演歌』をめぐる戦後大衆音楽史』 2010、光文社新書、参照)。

# 8. J-POP

1980 年代末には「J-POP」という言葉が使用されるようになる。最初は演歌や歌謡曲と区別して、日本人による洋楽系ポピュラー音楽を示していたが、その後、日本のポピュラー音楽全般を表す用語となる。

2007年以後、レコード業界は落ち込みが激しい。今後は、海外からの輸入ではなく、日本独自の音楽を外国、とくに東

南アジアにむけて発信し、外国へ影響も与えることも考えなければならない。問題は言葉の壁である。その一方で、ヨーロッパの歌手が日本の音楽を、日本向けに英語やフランス語で歌う例も見出される。

講演の最後には、活発な質疑応答がなされた。山田氏によれば、最近の日本の文化への興味は高く、とくに漫画やアニメも知られている。マンガやアニソンはすでにフランス語となっており、日本研究としてのポップ・カルチャーへの関心も高い。だが、日本についての発表を聴く機会が少なく、資料の入手法も知られていない。したがって、今回のような国際会議などに出続ける必要がある。とくに若い人、30代前半の人が出かけることによって、経験をシェアし、問題を意識することができる。想像力は問題ないし、旋律も良いのだが、問題は歌詞や情感である。

日本のポピュラー音楽文化は欧米とは消費の中身が違うのではないかという質問に対しては、ヨーロッパと日本の違いとして、ライブに対するとらえ方が違うことを挙げた。とくに日本では、演奏と聴く音楽が乖離し断絶している。また、若い世代(10代や20代)の好みが中心であり、偏りが大きい。また1960年代から70年代には演奏者はレコードよりも実演で収入を得ていたが、そのサイクルが短くなってきた。イタリアやアメリカでは、日本のような激しい変化はみられない。最近では、オンラインやネットの台頭によって業界再編成が起ころうとしている。

#### \*\*\*\*

最近、日本におけるポピュラー音楽研究の発展はめざましい。しかしクラシック音楽の専門家で、日本のポピュラー音楽がいつ生まれ、どのような経緯をたどって今日の活況が生まれたかについて知る者は少ない。例会での山田氏の発表は、膨大な資料や情報を駆使して明治維新前後の状況から現代までの変遷を検証した興味深いものであった。とくに印象に残ったのは、「ポピュラー音楽では商品としての市場性が重要であるところが、クラシック音楽とは違う」という指摘である。しかし猛烈な勢いで話をしてくださったものの、1回の例会では時間不足で、今後さらに時代やジャンルに焦点をしばっての講演を期待したい。

今回の例会では、講演後に会場の東京音楽大学附属図書館の内部を見学させていただいた。所蔵資料は2010年3月現在で図書55,983冊、楽譜50,730冊の他、録音や映像資料、雑誌など充実した内容であった。また資料検索に関しても情報サービス係だけでなく、大学院生によるサポートも積極的に展開していた。閲覧室や開架資料ばかりでなく、狭い螺旋階段を下りての書庫探訪は充実した楽しい時間であった。この場を借りて附属図書館の方々に御礼を申し上げる。

(せきね として 音楽文献目録委員会 事務局長)



# 事務局だより



- 2011 年度総会 5 月 28 日 (土) 13 時より、渋谷区 文化総合センター大和田で総会を行います。同封の総 会案内(黄緑 B 5 版)をご覧下さい。やむなく欠席さ れる場合は、返信用葉書で委任状を必ずお送り下さい。 新役員会メンバーも発表されます。
- 研究例会(総会後)を例年の通り開催致します。今回は、日本伝統文化振興財団理事長藤本草氏より、「歴史的音盤アーカイヴ協議会(HiRAC)の活動について」をご講演いただきます。その後、恒例の懇親会を会場地下のイタリアンカフェで催します。同封の返信用葉書でご出欠をお知らせください。研究例会は会員以外もお誘い合わせください。非会員の例会、懇親会の出欠は別途お知らせいただけると有難いです(会員宛返信葉書に人数併記も可)。
- この度の東北関東大震災では、多くの図書館も災害を被られたことでしょう。お見舞い申し上げます。幸い、会員自身やそのご家族の身に、危険は及ばなかったようですが、仙台の東北大学ほか、宮城学院大学音楽科では、図書館や楽器の損傷被害があったと伺っております。心よりお見舞い申し上げます。IAML本部メンバーからも多数のメッセージが届き、お見舞いと復興への励ましをいただいております。

## ■ 本部メーリングリスト・ヘッドライン

IAML2011年ダブリン年次大会は7月24日から開催されます。既に会議登録はオンラインで開始しています。 郵送での会議関係資料の到着が遅れており、以下のサイトをチェックされることを、強くお薦めします。 IAML\_MLで随時会議関連のお知らせも届いております。 要登録、要チェックです。より安い登録料での参加を可能にするには、5月末までに登録を!

http//www.iaml.info/iaml-uk-irl/dublin\_2011/inde x.html

- 寄贈資料 (2010年1月2011年3月)
- ・日本フルート協会より

「日本フルート協会会報」nos. 218 (2010.2)、219

(2010. 4), 220 (2010. 7), 221 (2010. 9), 22 (2010. 10), 223 (2010. 12)

- ・上野学園大学日本音楽史研究所より 「日本音楽史研究 第7号」(2010.10)
- ・日本音楽学会より

「平成 21 年度文化庁委託業務:音楽情報・資料の収集 及び活用に関する調査研究」「日本の音楽資料」のデー タベース化のための調査:報告書(2010.3)

・遠山一行氏より

「Fontes Artis Musicae 56/4,  $57/1 \sim 2$ 」(明治学院大学附属日本近代音楽館へ一部寄贈)

## ■お詫びと訂正

ニューズレター 40 号に編集上の誤りがございました。 訂正してお詫び申し上げます。

p. 15 久保田慶一氏「第 48 回支部研究例会報告」末尾 誤 従って今回の調査結果は暫

正 従って今回の調査結果は暫定的なものになっている。 ※詳しくは IAML 日本支部 HP のニューズレターバックナンバーでご確認ください。

#### ■ 事務局への連絡

IAML 日本支部事務局は、今期総会まで

の当面、下記の住所を連絡先としております。新役員 会が総会で発表されますと、事務局連絡先は変更にな りますが、目下のお急ぎのご連絡は、下記事務局長代 行に直接お知らせ下さいますようお願い致します。事 務引継終了まで、ナビゲート致します。

事務局長代行:藤堂

## >>>postscript<<<

今号も、お陰さまで無事発行することができました。 お忙しいなか寄稿してくださった関根さん、今回も直 前まで心配をおかけ通しだった藤堂さん、ありがとう ございました。 (柳原)

Newsletter 第41号

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

2011年4月20日発行

〒150-0046 東京都渋谷区松涛

藤堂気付

http://www/iaml.jp